

ハイスクールD×D 幻 想の守り手

アニメ・ゲーム大好き神影

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——これは、天月 真による守るための戦い

【入り切らないタグ】

・ストライク・ザ・ブラッド

・ FAIRY TAIL

・ 七つの大罪

・ 魔法先生ネギま！

・ 落第騎士の英雄譚

・ 空の境界

・ デート・ア・ライブ

・ 魔弾の王と戦姫

・ アカメが斬る！

・ ONE PIECE

・ BLEACH

・ オーバーロード

・ ログ・ホライズン

目次

第零章 始まり

第1話 1

第2話 8

第3話 19

第4話 27

第5話 35

第零章 始まり 第1話

——ザシユ……ザシユ……ザシユ……

ある町外れの倉庫で面を着けた一人の男が数十人の悪魔を双剣で次々斬り伏せ悲鳴を響き渡らせていた……

「く、来るなあああああああ!!!」

「お、俺達が何したってんだよおおおお!!!」

叫ぶように面の男に問う2人の悪魔。

『S級はぐれ悪魔ガグル……ピーナ。貴様らは自らが犯した罪を理解していないのか……。貴様らは一一般人26名を誘拐し、その魂を魔術に利用しようとしたそうじゃないか……』

はぐれ悪魔ガグル、ピーナの問いに静かにそして怒気を含んで返す面の男。

「お前ら！下等生物を幾ら殺そうと勝手だろ!!!」

「そうだ！人間風情が悪魔に逆らうんじゃねえ!!」

はぐれ悪魔ガグルは、面の男に向かって手に持つ斧を振り下ろす。

——が……ことごとく避けられ……

『フンツ！』

「ギヤアアアアアアア!!」

双剣による斬撃で、はぐれ悪魔ガグルは胴体を切断され息絶えた。

面の男は、次はお前だと指すようにはぐれ悪魔ピーナに視線を向ける。

「クソオオオオオオオ!!」

はぐれ悪魔ピーナは、巨大な魔力弾を次々に面の男に向けて飛ばすが双剣によって破壊される。

「死ね！死ね！死ねえええ!!」

『無駄だ……』

「ハッこれならどうだ！」

更に巨大な魔力弾を今度は、面の男の背後にいる人質に飛ばす。

面の男は、双剣を投げつけ魔力の球を相殺させた。

武器を失った瞬間。

「死ねえええええええ！」

はぐれ悪魔ピーナは、背後に隠し持っていた槍でつらぬこうとするが……

『……』

突然青白い雷が現れ、槍を受け止められる。

「な、何故その剣が此処にある!」

面の男の手元には、ついさつき魔力弾とともに相殺されたはずの双剣が握られていたのだ。

『ハッ!』

双剣により繰り出さる斬撃ではぐれ悪魔ピーナの体は、次々に切断され見る影もない姿にえとなった……

『フウ……』

息を吐くと手元にあつた双剣は忽然と消え討伐したはぐれ悪魔の確認をした。

ピッ……ポツ……ピッ……

プルルルル……プルルルル……ガチャ

『……』

『コードネーム……無銘』

『お前か、依頼はどうなった?』

『S級はぐれ悪魔ガグル、ピーナ、その他A級はぐれ悪魔数名の討伐依頼は完了した……』

後始末を頼む』

『わかった。専門部隊をそちらに向かわせる。早く戻って来い』 プツ

数分後、周りに複数の魔法陣が展開され、魔法陣から真つ黒なスーツを着た男達が見え、息絶えたはぐれ悪魔のもとへ駆出し、死体の処理を開始した。

その中の一人が、面の男に近寄り敬礼をした。

「はぐれハンターの、無銘さん、ですね？この度は我ら

『悪魔』の依頼を受けて頂き感謝致します」

『ここ以外の現場にもあるので宜しく頼む』

「了解しました」

そう答えると面の男の瞳が赤い瞳に変化し周囲の空間を渦状に歪め忽然と姿を消した。

敬礼をした悪魔は、それを見送ると現場に向かった。

現場に到着すると一人の悪魔が話しかけてきた。

「隊長、彼奴は何者なんですか？」

「俺も詳しくは、知らないが彼奴は人間であること、魔力を身に秘めていること、誰も

見た事無い術を使うこと、そして『セイクリッド・ギア神 器』を持つていないということだけだ……」

「あり得ません!!人間が『セイクリッド・ギア神 器』も無しでS級はぐれ悪魔ガグル、ピーナおよびA級はぐれ悪魔数十名を殲滅するなど!」

「だが事実だ。現に我々は、今その現場に直面しているだろ……」

そう答えると悪魔は、他の現場へ向かった。

話しかけた悪魔は、暫くの間驚愕した表情を変える事が出来なかった。

古びた建物の玄関に先程まで町外れの倉庫に居た面の男が渦状の空間の歪みとともに現れるとドアノブに手を掛ける。

ガチャ

『戻ったぞ、マスター』

ドアを開けると、中は、外からの雰囲気とは違い、クラシックの音楽が流れるキレイなBARとなっていた。

ドアを開けた目の前にカウンターがあり、そこには筋骨隆々な体に無精髭を生やした男がワイングラスを拭きながらドアを開けた人物を見つめる。

「相変わらず速いな、『無銘』」

マスターと呼ばれた男は、見知った人物だと分かると表情を変えずに声を掛ける。

『相変わらず無愛想な顔をしているなマスター』

カウンターの椅子に座りながら答える。

「うるせえ。この顔は生まれつきだ……とところでこの後はどうするんだ？もう一件依頼が来てるが受けるのか？」

『いや、いい加減休もうと思う。ずっと面を着けたままで顔の中が蒸れてしまった……』
「そんな変な面とつとと外しちまいな。渦や狐の面といい、いちいち変えなくてもいいだろ変な奴だな」

「無銘」と呼ばれている男が面に手を付けながら、不快さを口にするが、マスターに突っ込まれる。

『これは、正体を隠すための物だからな、人前では外さんよ。例えそれが付き合いの長いマスターでもな……』

「フンツ……まあいいさ。お前さんの正体が何であれ興味は無い。はぐれ狩りの仕事をしてくれれば問題ない」

『それでは、失礼するぞ』

席を立つと、奥の階段を上り、三階の《3 0 5》の部屋へと入っていった。

部屋に入ると、マントを脱ぎ捨ていくつかの装備を外し外装だけの服装に変わった。

そして最後に狐の面を外すと、真マコトの姿が現れた。

「やれやれ、少し帰りが遅くなったな」

部屋の時計は、深夜二時をを過ぎていた。

「ここでの生活を始めて一年が経つが……ようやく、この体にも馴染んで来たな」

肩や腕を回しながら体を確認をする。

長い時間動き続けて来たことで真に睡魔が襲う。

『ふう、そろそろ寝ないとな……』

口に手を抑えながら、隠しきれない程の大きな欠伸をすると、部屋に備え付けられている簡易シャワーを浴び、汗を流し終えると部屋の電気を消し、ベットに入り眠りについた。

第2話

—— チヨチヨ……チヨチヨ……

小鳥の囁りを耳にしながら、ベッドから起き上がり体を伸ばす。

部屋の時計に目を向けると、針が八時を指していた。

「やれやれ、もう少し眠れると思っていたんだがな。」

午後から依頼が来るだろう、支度しなくてはな

ベットから降りると洗面台に向かい、顔を洗うと、部屋の真ん中で座禅を組み、瞑想を行う。

時間になると、慣れた動作で、普段着から外装と装備を着け、マントを羽織り、最後に狐の面を付け、部屋を出ると、BAR兼、はぐれ狩り専門ギルドへと向かう。

ガチャ

——ガヤガヤ……ガヤガヤ……

店内に入ると、一般の客は二人位の入りようであったが、慣れた足取りで、更に店の奥にある鉄で出来たドアを開け中に入って行く。

中に入ると、そこにははぐれ狩りギルドのたまり場であった。

中には、男性だけではなく、鎧を着た女性や魔術的な防具を着た者が、酒や食事を摂っていたり、情報を交換や、達成した依頼内容を話していたりと様々だった。すると、一つのグループが話しかけて来た。

「よう！、『死神』の兄ちゃん！今日も、元気ですかい？」

グループの一人が話しかけ、持っているグラスを掲げると、同じテーブルに居る仲間や、周囲のグループが同様にこちらに向かってグラスで挨拶をしてきた。

『なんだ、『死神』というのは？俺の名は、『無銘』だぞ？』

不意に首を傾げる真。

「なんだ知らねえのか？兄ちゃんが噂になっっているんだよ。あるはぐれ狩りは、面で決して姿は見せないが、討伐依頼を出せば、100%依頼を完了させ、目を付けられた相手は生きて返されない事から、『死神』には気をつける。なんて、噂が裏の社会に広まってんだ。」

『なんて、はた迷惑な話だ……あまり尾ヒレがつくのは困るんだがな……』

噂話を聞き、深い溜め息をつきながら、店内のカウンターへと向かって歩き出す。

『よう、マスター』

「よく来たな、無銘。今日はどうする?」

昨日夜遅くに会ったばかりのマスターに挨拶をし、カウンターに座ると、今日の予定を聞かれた。

『その前に昨日の報酬だが……』

「分かつている。いつも通り、報酬の半分を被害者にたいしての見舞金に、残り半分の報酬を半分ずつ、店とあんたに振り分けたよ」

『いつも手間を掛けるな』

「良いってことよ。しかし、お前も珍しい奴だな。報酬の半分を被害者とはいえ渡しちまうなんて、今まで居たはぐれ狩りの奴らからは想像つかないぜ」

『世の中にはそんな珍しいはぐれ狩りいるんだよ。それより、また奥のテーブルを借りるぞ?』

そう言うと、店の奥のテーブルに指を指し確認する。

「構わねえよ。あの場所を使うのはお前くらいだ。他に注文はあるかい?」

『では、紅茶をポットでくれ。ミルクなし、角砂糖二つで』

「分かった、後で持っていく。奥のテーブルで待っていな」

そう言うと、厨房の奥へ行ってしまい、準備に取り掛かった。

真はそれを見届けてから、奥のテーブルへ移動し、懐から持参してきた本を取り出し、読書に吹けた。

暫くすると、厨房からポットとティーカップを持ったマスターが現れ、真の目の前のテーブルに置くと、すぐに他のはぐれ狩りのテーブルから声が掛かり、その対応に向かつて行った。

本にしおりを挟み、紅茶をティーカップに注ぎながら、香りを楽しんでいると、ギルドのたまり場のドアが突然バーン！と勢いよく開かれた。

突然の事でたまり場に居たはぐれ狩りの全員が音のした方へと目を向けると、赤と黒を強調した神父服に身を包んだ金髪の男性とそのすぐ後ろには、灰色のローブを身に包んだ茶髪のツインテールと青い髪でショートカットの少女二人が立っていた。

青い髪の少女の背中には、身の丈程の大きな布に包まれている物を背負っていた。

金髪の男はたまり場を見渡し、まるで品定めをする様な視線を向けると。

「フンッ。どいつもこいつもロクなのが居ないな、正直言つてガツカリだな」

鼻で笑い、小馬鹿にした様な台詞を吐きながら店内へと足を踏み入れた。

すると、その台詞を聞いたギルドメンバーは怒りに満ち、不快そうな顔を三人に向けていた。

「トネリ神父。あまりそのような言葉を大勢の場で言うのはどうかと思うのですが……」

「本当の事を言つて何が悪い」

「で、ですが……」

「イリナ。この人に何を言つても無駄だ。自分勝手に物事を判断する御方なのだから」

ツインテールの少女がトネリと呼ばれている男性を宥めようとするが、青髪のシヨートカツトの少女が肩に手を乗せ、呆れ顔でやめさせた。

そして三人がカウンターまで来るとマスターに金髪の男性が質問をした。

「マスター、此処に『死神』という人物がいると聞いたんだが何処にいる？」

「……そんな事を聞いてどうするんだ？ 依頼でも出すのか？」

「いや、こんな所に居るより、我々教会側に来て欲しいという、所謂スカウトつてやつだよ」

「こんな所で悪かったな。そりゃあ彼奴が行きたいと言うんなら連れて行くといいさ」

「ああ、言い方が不適切だったな、そいつが行く行かない関係なく我々は『死神』を連れて行く」

金髪の男性の言葉を聞いた店内の全員が驚愕した表情を浮かべた。

「そいつはどう言うことだ?」

マスターはしかめた顔をして神父を睨む。

「何、簡単な事だ。彼の持つ力は危険だ。故に我々教会の人間が管理しなくてはならない存在だと判断したのですよ」

淡々と理由を述べていると、バンツ!とテーパーをたたく音がする。

「巫山戯るな!!兄ちゃんの何処が危険だと言うんだ!」

音かした方に振り向くと、店内に居た全員が三人に向かって睨んだ。

「……一人で複数のはぐれ悪魔を討伐出来る人物は危険ではないと?」

「ああ、そうだ!例えばどんなに強力な力が有ろうと、兄ちゃんは一度も人を傷つけることはしていないし、犠牲を出した事もない!」

「だからと言って。このまま野放しにして置くわけにはいかない。彼は我々教会で管理する」

「それはそつちの勝手な都合だろうが!!」

「そう取つても構わないが、ならばどうするのだ?」

「決まってる!あんた等が兄ちゃんを無理矢理連れて行くつていうんなら、俺たちは力づくでもそれを阻止してやるからな!」

そういうと、男は我慢の限界に達したのか立ち上がり、自分の得物である大剣バスターソードを手に持ち、三人の前に立ち塞がった。

「やれやれ、こちらとしては、穏便に済まそうとしたんだがな……」

明らかに挑発的な物言いなのに、自分には全く非がないといった態度が、さらに男の怒りを増長させる。

「この……巫山戯やがってえええええ!!」

あまりの態度に、我慢の限界だったのか、大剣バスターソードを振り上げ、神父に向かって走り出した。

「イリナ、ゼノヴィア彼奴を止めろ」

「了解」

ネロ神父に向かって行く、男の突進を目の前にして二人は落ち着いて行動した。

「ゼノヴィア頼んだわよ」

「ああ」

ゼノヴィアと呼ばれた少女は、背中に背負っていた布を取ると、大剣バスターソードと似た大剣が出てき、両手に持ち構えた。

「俺と力で勝負か？上等だああああ!!」

男は自身の得物である大剣バスターソードをゼノヴィアに振り下ろす。

それに対して、ゼノヴィアも自身が持つ大剣を振り上げ迎え撃った。

——ガギーン！……バキツ……

折れたのは男の得物である大バスターソード剣だった。

「何!!」

男は信じられないといった表情で呆然としていた。

その隙をイリナと呼ばれた少女は見逃さず、腕に巻いてある紐を解き、振うと、紐の長さが伸びて、天井の吹き抜けの柱を通し、男の腕に巻きつき、引つ張り吊り上げた。

「く、くそおおお!!」

男は吊り上げたままの状態で悔しさを露わにしたが、どうすることもできなかった。

その男に、トネリ神父は近づいて行った。

「どうですか？我々教会の力は。お前如きがいくら我々に挑もうと、こんな風に制圧できなんだよ。身の程を知れ雑魚が」

「なにを、自分は何もしてない癖に……」

「お前如き、僕の手を汚すまでもないと思っただからだよ。……ただお前の言うことにも一理ある。最後は僕自身の手で始末してあげよう」

そういうと、トネリ神父は、右手を軽く上げると、空間が歪み、そこから一振りの剣が出る。

「光栄に思うんだな。貴様ごときがこの僕が持つ『聖剣』で断罪されるのだからな」

男の目の前に行き、薄ら笑みをきかせ、聖剣を振り上げ、そして……

「判決……死刑!!」

振り下ろした。

——キイイーン!!!

男は目を瞑っていたが、いつまでたつても痛みがこない事に不思議に思い、目を開けると、そこには狐の面が近くにあり、刀で『聖剣』を受け止めていた。

『少し……やり過ぎだな……』

冷静な物言いではあるが、内心は怒気が含まれている口調に二人の少女と店内にいるギルドメンバーはたじろいだが、神父だけはそのことに気づいていなかった。

「何だね、君は？部外者は引っ込んでてくれないか？」

「俺は、お前が探している人物だが、何か問題があるか？」

その台詞と同時に神父の『聖剣』を弾き、後方に下がらせる。

「ああ、君がそうでしたか。では話が早い。僕たちと一緒に教会に来てください」

『断る』

「では仕方ない。力づくでも連れて行かせてもらう。イリナ、ゼノヴィア。彼を捕えろ」

「了解」

そう言うと、吊り上げていた男から紐を解き、自分の手元に戻し、大バスターソード剣を叩き折った大剣を構えてこちらに向かって攻撃する準備をした。

『その前に、俺は先に受けたこの依頼を優先させるぞ。マスター、依頼番号37番？魔物の山の討伐依頼を受領してくれ』

カウンターに居るマスターにそう告げると『わかった』と腕を挙げて答えた。

『話はまた後だ、じゃあ……』

「さて」

踵を返し、店内を出ていこうとしたときに、神父に呼び止められた。

「我々もその依頼に同行させてもらおうか」

『何故だ？』

「君の実力をこの目で見てみたいんだよ」

薄ら笑みを浮かべて死神真を見ていた。

『……分かった。ただし、傍観しているだけにしろ。戦闘になったら此方の指示があるまで手を出さない事。それが条件だ』

「ああ、分かった」

『そつちの二人も、いいな？』

二人の少女から返事はなかったが、しつかり頷いていた。

『では、行くとしよう』

そう言うと、無銘^真はギルドを出ていき、それに続いて神父達が行った。

第3話

——タツ……タツ……タツ——

森の中を点々と進み続ける、無銘^真、ゼノヴィア、イリナ、そんな中……

「ぜえ……ぜえ……ぜえ……」

三人より二十メートルも後方に居るトネリ神父は、息を切らしながら全く息を切らし
ていない、ゼノヴィア、イリナ、先行する無銘^真を追いかけていた。

「お、おい……そんなに……急いで……登って行くな……ハア……ハア……もう少し
ペースを……落とせ……」

前に居る三人に文句を言いながら、ゆつくりとだが登って行く。

「く、クソ……何故この僕が……森に登らなきゃいけないんだ……」

またも、悪態を吐きながら登って行く。

《無銘side》

俺達三人はトネリ神父の到着をゆっくりと待っていた。

『おいおい……彼奴、体力が無き過ぎないか?』

性格があれでも教会の戦士だろうに……

一応バロールの魔眼で闘級を調べて見るか。

魔力600 武力20 気力10 合計闘級630

か……あまり身体を鍛えていないな。

「トネリ神父は聖剣の適合率が高いので、他の教会の戦士たちよりも位は高いんですけど………実戦に出たことが殆どなくて………激しい運動などは苦手なようで………」

俺の疑問にイリナという少女は、苦笑いをしながら疑問に答えてくれた。

やはりそうか……

能力にかまけて自身を鍛えるのを疎かにしたのか……

「それよりも死神、聞きたいことがあるんだが」

俺とイリナが喋っている中、ゼノヴィアという少女が話しかけてきた。

『俺の名前は死神ではなく、無銘だ。で、何だ?』

「ん……それは、すまなかった。それで聞きたいのだが、その腰に差している刀は聖剣か? 魔剣なのか? 先ほど、聖剣の一撃を防いでいたが」

『いや、これは聖剣でも魔剣でもない。その証拠に魔力も聖なる波動も感じないだろ』

俺は、腰に差している刀を抜刀し、二人の目の前に見せるようにした。

「確かに、何も感じない。どうなっているんだ？」

「聖剣を受け止めたのに、傷一つ付いていないなんて！」

無名とはいえ、鍛冶師を営む妖怪に打ってもらった刀である。そこいらの名刀では、この刀に傷を付けることは敵わないだろう。

二人が、まじまじと刀を凝視していると……

『どうやら、来たようだな』

二人が俺の背後を見ると、トネリ神父がようやく到着したようだ。

「ハア……ハア……ハア……」

「大丈夫ですか？トネリ神父」

「ハア……これ位……ハア……何とも……ない……ハア……」

イリナが心配そうに声をかけるが、息切れをしながらも強気な態度を崩さないようだ。

『いや、来たというのは——』

俺が、山頂に向けて視線を向けると、三人も何の事だと、同じ様に山頂に視線を向けると……

——グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!
大地が裂けそうな雄叫びと共に五メートル以上の魔物の群れが俺達の前に現れた。

——来たか』

「な、何だ！この数は!!」

『何だと言われても、依頼に書いていただろ。魔物の森と』

トネリ神父が驚いて大声を出す、俺は気にせず説明する。

「だとしてもこの数は、多すぎる!!」

『声を荒げようと、数が減る訳ではないだろ。おそらく、何処かの組織が魔物を使って実験を行おうとしたが、魔物が逃走しこの森に逃げ込んだ結果、討伐依頼が出されたのだろう。此処からは俺に任せお前たちは、後方に下がれ』

ギルドで話した通に三人には、後方に下がって傍観して貰う予定だったが……

「冗談じゃない。こんな大物を前に引けないね。ここは僕がやるから、君が下がるんだな」

「それでは約束と違うが?」

「そんな約束、忘れた……ねっ!!」

その台詞と同時に、トネリ神父は魔物に向かって駆け出すが、それをじつと見ていた魔物の一匹がトネリ神父に向かって体当たりすると。

呆気なく吹き飛ばされ、そのまま気絶した……

『彼奴は……何がしたかったんだ?』

「重ね重ね申し訳ない」

「ごめんなさい」

俺は何も考えず相手に特攻し、呆気なくやられたトネリ神父の行動を、後ろを振り向いてゼノヴィアとイリナに尋ねたが、いつもの行動なのか、二人に謝られた。

『ハア……仕方がない。早く神父を回収して後方で治療してくれ』

それを聞いた二人は、呆れた表情で近づいていき、トネリ神父を回収すると、後方に下がって行った。

『そろそろ、始めるとしよう』

俺は右手に持つ草薙の剣を構え、中央に居る魔物へと、移動する。

「グオオオオ!!」

魔物の一匹が俺に向かって体当たりをするが、それを左に避け、さり際に魔物の胴体を切り裂く。

その後、次々に魔物が炎や雷を吐きながら攻撃を仕掛けてくる。

このまま避けると、背後に居る二人にも当たってしまうな……

仕方ない……

『土遁・土流壁……』

地中から岩の壁が現れ、魔物のが吐き出した、炎や雷を防いだ。

『早急に片付けなければな……』

俺は左手を構え、雷を起こす。

『千鳥千本……』

腕を振り払うと、無数の雷の針が魔物の視界を奪う。

「グオアアアアアアアア!!!」

魔物達は、目元を抑え叫び声を上げる。

その空きを見逃さず、一瞬で魔物の群れに近づき次々に、魔物を切り裂いていった。

《無銘 side out》

《ゼノヴィア side》

無銘の力は凄まじいものだった……

最初は死神と呼ばれる程のはぐれ狩りが、私とどれ程の差があるのか、実力を確かめようとしていたが……

遠い……

とてもでは無いが、今の私が挑んで勝てるとは、考えられない……

無銘は、右手にある刀を構え、切っ先を魔物に向けた瞬間、姿がかき消え、いつの間にか魔物の一匹が胴体事切り裂かれていた。

それに気づいた他の魔物が、此方に向かって、強力な炎や雷を吐き出すと、無銘は地中から岩の壁を作り出し、魔物の攻撃を防ぐと、左手から雷を発生させ、無数の雷の針を飛ばし、視界を潰すと、一瞬で魔物の群れを斬り裂いてしまった……

「イリナ、今の動き見えたか……」

「全然……何も……術による攻撃以外、全く見えなかった……」

私とイリナは無銘がいる場所に視線を送っていると……

『魔物の攻撃で、森が荒れてしまったな……仕方ない……』

無銘がそう言い、両手を合わせると。

『木遁・樹界降誕!!』
もくとん・じゆかいこうたん

戦闘で荒れ果てていた土地がどんどん木々で生い茂っていく。

「な、何なのこれ!」

「木々が増殖しているのか!」

暫くすると、先程の戦闘により荒れ果ててしまった森が元の状態に戻っていた……

『依頼完了だ。ギルドに戻るぞ』

つと、いまだに気絶しているトネリ神父を担ぎ上げ、軽々と岩山を下って行き、呆然としていた私達も急いで後を追いかけて行った。

第4話

——ガヤガヤ……ガヤガヤ——

一つのグループが先程帰還した無銘と教会の戦士について会話していた。

「聞いたか、例の教会から来た神父が死神の旦那と一緒に討伐依頼に同行したらしいが、何の役にも立たずに勝手に突っ込んで返り討ちにされたらしいぜ！」

「死神の旦那が受ける依頼は、どれも規格外な物ばかりで、無茶だと分かるだろうに……」

「案外、教会の戦士とやらもたいしたことないんじゃないか？」

「いや、隣にいた二人の少女達はなかなかの腕らしいぞ……二人がかりとはいえ、大剣バスターブレードを持ったアイツの剣を破壊してなおかつ拘束したんだからな。並大抵の実力じゃないぜ……」

「そうだな……全員が全員、あの神父みたいな奴ばかり程の実力じゃないってことだな！」

グループの中の一人が立ち上がりグラスを掲げる。

「まあ！今回は死神の旦那の活躍に乾杯しようや！」

「そうだな。それじゃあもう一度、乾杯!!」

「「乾杯」」

グラス同士が打ち合う中、店内の奥のテーブルでは話の内容の中心である三人と、いまだ床で気絶しているトネリ神父がいた。

《無銘 side》

『やれやれ……相変わらず騒がしいな。御二方もそう思わ……』

無銘の背後で騒いでいるギルドメンバーを一瞥して、前に座っているゼノヴィアとイリナに同意を求めよう、振り向くと……

——ガツガツ……モグモグ——

——ガツガツ……モグモグ——

当人である二人は目の前にある料理に集中していた……

討伐報告のためにギルドに戻ってきたが、時間が遅い為夕食に誘ったのだが……

自分で誘っておいてなんだかんだ……それでいいのか……教会の戦士は……

「ちよつと、ゼノヴィア！それ私の皿にあつたお肉でしょ！勝手に食べないでよ!!」

「何を言っているイリナ！ここは食事という名の戦場だ。なればこそ一瞬の油断が命取りだ。隙を見せたのが君の敗因だ！」パクツ

「あゝまた食べたゝゝ!!」

『一体何をやっているんだ……マスター追加注文だ』

「あいよ……」

二人の食事のやり取りを見ながら、無銘はマスターに追加の注文をするのであつた。

しばらくして、二人は満足したのか、食事の手を止め、無銘に感謝の十字を切り、真剣な顔で質問しだした。

「それで『無銘』よ。もう一度質問するが、我らと一緒に教会の戦士にならないか？貴殿と一緒に戦つてくれれば、これほど心強いものはないのだが……」

食事している時とは打つて変わつてゼノヴィアの質問に、無銘は内心感心するが、自身の答えは変わらなかつた。

『最初に言つたように、お断りさせて貰う……』

「……理由を聞いても?」

『教会側でも確かに討伐の依頼が入くるだろうが、それを実行するに對して色々と手続きが多いだろう。編成人数、その場所までの時間などを考えると、教会にいるより現地

での依頼を受けた方がより速く手が付けられるからな』

「なるほど……そういう考えもあるか……」

『さらに言えば、トネリ神父の下で働くのはどうも性に合わない……こいつには協調性がなく、相手を見下し、慢心する傾向がある。そんな奴がいると逆に足手まといだ……』

「まあ、気持ちにはわからんでもないが……そういう理由なら、仕方ないな」

『さらに言えば、俺は悪魔からも依頼を受けているからな、下手をすると処罰の対象になりかねない』

「わかった……其処まで言うのであればこちらも引き下がろう。ただ、こちらと敵対するという意志はないのだな？」

『そちらが手を出さなければ、こちらも手を出さない……それだけだ』

「では、一つ頼みがあるのだが……」

『何だ……？』

「私と手合わせ願いたい！」

『何……？』

「貴殿の戦い方を拝見したが、スピード、パワー、剣筋、どれをとつても私よりはるかに上だ！。だから、手合わせすることで、私はさらに上の段階まで戦士として成長するかもしれないからだ！」

ゼノヴィアはテーブルを叩き、体を前に出し、真剣な顔つきで手合わせを願った。

『一つ言っておくが……そんな簡単に技術というものは上がるものではない。地道な鍛錬と、それを継続することによって身につくものだ……』

「そんなことはない！強いものと戦えばそれに応じて経験が増し、強くなるではないか！」

久しぶりに見たな……

これ程パワー思考にあるやつは……

確か……脳筋と言うのだったな……

「さあ、善は急げだ！早速外へ出て私と「何をすると言うのですか……ゼノヴィア？」……っ!?」

背後から冷たい女性の声がゼノヴィアに向けてはつけられると、ゼノヴィアは、ギギギツとまるで機械仕掛けの人形のように首を後ろに向けた。其処にいたのはシスター姿の北歐的な顔立ちの青い目をした美女がにこやかな笑顔を、ある意味、冷淡な笑顔を向けていた。

「シ、シ、シスターグリゼルダ!？」

背後にいるシスターにゼノヴィアは大声を上げ驚いた。

「まったく貴女達は……戻ってくるのが遅いと思つて迎えに来てみれば……夕食をとる

ならまだしも、争い事を起こさせるなんて一体どういうつもりなんですか？」

シスターは笑顔のままゼノヴィアに問いかけるが、当のゼノヴィアは震えて顔中から汗が滝のように流れて、シスターの質問にしどろもどろの様子だった。

あのシスター……

相当の実力者だな……

トネリ神父とは比べ物にならない……

『もお、その当たり良いのではないか？』

俺の間にシスターは、此方に振り向くと。

「これは御見苦しい所を御見せしました。申し遅れました。私は教会の戦士のグリゼルダ・クアルタと言います。こちらのゼノヴィアとイリナの上司になります」

『これはご丁寧に。俺は、はぐれ狩りの無銘と言う者だ』

「存じております。とても優秀なはぐれ狩りであつて、別名が死神と噂を聞き及んでおります」

『あまりその名は、好いていないのだが……』

「それは、失礼しました。ですが何の連絡もなく今の今まで忘れていたり、ネロ神父の看病もしなかったのを私は責めているのです。何より、貴方に対してのゼノヴィアの暴力的な態度に対して怒っているのです」

「し、しかしシスター、私としてはこれを機にもっと戦士としての技量が得られればと思っているからこそ、手合わせを願っただけで……」

「黙りなさい、ゼノヴィア。そんなのだから貴女は成長しないのです。何でもかんでも力や戦いで物事を解決しようとするからいけないのです。そもそも貴女達三人の目的はこちらの方の勧誘でしょう？なぜ与えられた使命を果たせないのですか？」

「す、すいませんでした!!」

「ではこの件は協会の支部に戻ってから改めて説明させていただきます。早くトネリ神父を連れて支部に戻りましょう」

「ハイ!!」

そこからの行動は速かった。いまだに気絶しているトネリ神父に駆け寄り、腕を肩にかけ、起こしてギルドの外へと出て行った。

「この度は大変お騒がせしました」

こちらに近づくと、シスターは深々と頭を下げて謝罪した。

『別に構わんさ……多少騒がしかったが楽しい時間を過ごさせてもらった』

「そう言っていただけだと幸いです。それで改めてどうでしょう？私たちと共に教会の戦士として戦ってもらえませんか？」

『あの二人にも言ったが、辞退させてもらう。理由はあの二人に聞いてくれれば分かる』

「わかりました。ではこの辺で失礼させていただきます。貴方のこれからに幸あらん事を祈っております」

目の前で十字を切ると、シスターグリゼルダも店を出て行った。

《無銘 side out》

「今回は、忙しい一日だったな無銘……」

『全くだ……それよりマスターそろそろ部屋に戻らせてもらおうが後で部屋に紅茶をポットごと持ってきてくれ……』

「了解した。後で持っていく……」

俺は、ゆつくりと自身の部屋へと向かって行った……

第5話

——教会の使者が現れてから数日——

『ハア……』

真は、あれからというもの……様々な組織や機関から勧誘が絶え間なく続いていた……

「無銘……溜息が漏れているぞ……」

『ああ、マスターか……』

カウンターの奥から現れたマスターは無銘に紅茶を入れたカップを手渡す。

「それ程の相手だったのか？さっきのロスバイセと言う娘は？」

『アースガルズの『戦乙女』ヴァルキリだったのだが……英雄としてアースガルズに来ないかと勧誘されてな……』

無銘の返答にマスターは、首をこちらに向け驚愕した表情を浮かべた。

「ほう、英雄とな？そりゃあ凄いな……いったい何故、そんな名誉な事を断ったんだ……？」

アースガルズの勇者ともなれば死後……その魂はヴァルハラヴァルハラの戦士となり将来を約

束されたも同然のはずなのだ。

『そもそも、俺はどのの勢力につく気はない。傭兵が性に合っている』

紅茶を飲みながらそう語る無銘。

「もったいねえな……それで？　そんだけ疲れているのは、何もその『戦乙女』ヴァルキリーの娘だけが原因ではないだろ……？」

『ああ……しつこい『錬金術師』に『狂神父』、しつこく追ってくる『情報屋』に生粋の『戦闘狂』……上げるときりがない……』

無銘が上げた者に苦笑い浮かべるしかないマスター……

「それは、災難だったな……」

『全くだ、ハア……』

無銘は、思わず溜息を零す。

店の奥へと戻ろうとするマスターが突然こちらに振り向いた。

「おっと、そうだった」

『ん？　何か用事でもあるのかマスター……？』

「ああ、お前個人に依頼として手紙が来ているぞ、無銘」

そう言うともマスターは懐から一枚の手紙を手渡す。

『中は見えていないのか……?』

「ああ、中身はアンタにしか見せるなど依頼主に言われている……じゃあ、なんかあったら呼んでくれ」

そう言いながら、マスターは店の奥へと進んでいった。

無銘はいつもの指定席へ行くと、差出人不明の封筒を開けた。するとそこには、改めて本当の依頼を伝えたいという内容と、場所の指定が記されていた。

場所を指定しているという事は……誰にも聞かれない仕事という事か。それに、この招待状に微かに感じる魔力の残留は……まあいい、向かうとしよう……

無銘は手紙をしまい、指定された場所へと向かう。

とある高級リゾートホテルに無銘は佇んでいた。ホテルには無数の高価な装飾が施されており、一般の人からすると近寄り難いものだった。

『待合せの場所にしては目立ちすぎるな……』

無銘はそう呟くと、ホテルの中へと進んでいった。

「無銘様、お待ちしておりました」

ホテルのエントランスまで進むと、そこにはスーツを着た一人の女性が待ち受けており、此方に向かって一礼する。

『依頼主のいる場所に案内してもらおうか……』

「畏まりました。依頼主のいる場所へ案内いたします」

女性がもう一度一礼をすると無銘は女性と共に依頼主の入る場所まで、移動を開始した。

無銘は移動中に依頼主が何者なのか理解した……

この女から感じる魔力。

やはり……『墮天使』が持つ魔力と同じ性質のものだな……

墮天使からの依頼は初だが……

相手がよほどの外道バカじゃないといいんだがな……

無銘は数ある依頼の中に墮天使の討伐をいくつか受けていたが……無銘が出会った墮天使の大半が、自尊心の固まりで人間を見下し、慢心する傾向にある為、あまりいい

印象を持っていなかった。

「依頼主の方はこちらでございます」

女性は扉の横に立ちドアノブに手をかけ開く。扉の先には金髪にスーツを着た一人の男性がいた……

「おお！ きたきた、まってたぜえ…… 死神、さんよ……」